

その男の隣に、いつの間にか幼い男の子が座っていた。どこかで見たような、と男は思った。ここは多摩川の土手。男は会社の帰りにいつもここへ寄っては、川面の風を感じるのがささやかな楽しみなのだ。

男はその子の顔をのぞき込むように見て言った。

「坊や、お母さんはどうしたの？ もう日が暮れるよ。送ってあげようか？」
すると男の子が、

「おじさんも早く帰った方がいいよ。奥さんが首を長くして待ってるよ」と返してきた。なんとまあ生意気なことを言うかと、男は少しムツとしたが、なんとなく憎めない顔をしているので、「そうだなあ」と答えた。

「おじさん、子供はいる？」と、男の子がいきなり聞いてきた。

「……なんで？ 君はそんなこと聞くの？」

「ボクはおじさんのところに行くって決めたの。早い者勝ちだから先を越されちゃダメなんだ」

「え？ 俺のところに来るって……？」

男は、わけのわからないことを言う変な子だと思った。

「あっ！おじさん、奥さんだよ！」と、男の子は後ろを指さした。

「えっ？」と、男は後ろを振り向いた。

確かに、妻がこちらに向かって来るのが見えた。男はハッととして、

「どうして、アレが俺の奥さんだとわかったの？」と言って振り返ったが、男の子は姿を消していた。哑然としている男の傍に、妻がニコニコしながら近寄ってきた。

妻は満面笑顔でさつき男の子がいたところに座り、男に寄り添った。

そして妻は唐突に妊娠を告げた。

「……えっ！ 本当?！」

男にとっては七年も待った待望の第一子だ。妻は男の帰りが遅いので待ちきれず土手までやってきたのだった。男はうれしさのあまり男の子のことをいつとき忘れていたが、妻に聞いた。

「おまえが来るとき、俺の隣に男の子がいただろ？」

だが、妻は誰も見なかったと言う。男は目を見開き、妻の顔をじっと見てしばらく思索していた。そして男はやさしく妻のお腹に手を当てて言った。

「俺たち、選ばれたみたい……この子にさ……」